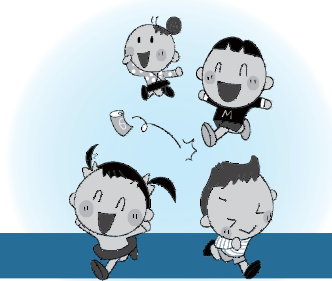


こころをつなぐ まちづくり

人権シリーズ vol.76



8月末、大分県隣保館連絡協議会で、2009年6月に96歳で亡くなられた人権の詩人、江口いとさん[※]の郷里、愛媛県中央市を訪ねる機会を得ました。江口さんは40年間に講演すること約3千回、人権の詩人として生涯をかけて、部落解放を全国で叫び続けてきました。今回は、江口いとさんを偲び娘の江口徹子さんが書かれた手記を紹介します。

「母の遺したもの」

江口 徹子

「天寿を全うする」という言葉がありますが、96才で逝った母は正にそうであると考えますが、2年程前の2月、とても寒い日でありましたが、母が最も愛した「東宮子ども会」の発表会に参加した時の風邪引きがきっかけで体調を崩し、入院したり自宅療養をしたりの日々を送る中、癒ゆることなく逝ってしまったのです。母のことです、きつと多くのことを思い残したと考えます。

主治医の先生に常に状況を伺いながらも、今年2月の子ども会発表会にも参加し、「おばあちゃんは今来年少の子ども会にはよう来んと思うけど、みんなで力を合わせて頑張ってほしい。差別のない世界で皆さんが伸び伸びと生きていけることを願っています」と語りかけたのです。今年は特に地域あげての集会所祭りとなり、子どもたち、教職員、集会所内外狭しと集まってきた人達、また、終日森高県議さんの

お顔も見えました。

母は、週3回デイサービスセンターへ通い、またヘルパーさんとも散歩をしながら回復に精一杯頑張っていました。

亡くなる1カ月前から歩行が困難となり、自宅ベッドでの看護となりましたが、常に母は「徹子さん、お母さんはどうしてこうなったか聞かせて、いつになったら元のように元気になるの」と私を困らせた母、昨日のように思い出されます。枕元には何時も、私の娘が、「おばあちゃん元気になって」と贈った、きんさん、ぎんさんの写真がありました。また、優しい息子は、仕事の行き帰り、夜間、と母を見守ってくれたのです。

30余年わが歩み来し荊の道
子にも孫にも踏まさじと思う

この短歌は、生涯、人間解放を願い戦争と差別のない社会の実現を願った母の人間としての叫びであり、親鸞さんを深く信じ、仏教者でもあった母の祈りにも近いものでありました。

また、母の遺した詩の一つに、受けて立つ差別[※]があります。

何処へ行っても
何処まで行っても
追いかけてくるこの差別
もうこの差別から逃げることをやめ、振り返ってにっこりと迎えることに決めました

この差別の不合理を
叫び続けて歩きたい

西に東に南に北に
今日も明日もあさっても
差別が無くなる日まで歩きたい

もう言葉では語りかけてくれない母ですが、その魂が純粹なる運動や教育の中でしっかりと受け継がれ、一日も早い差別の完全解消の社会が実現することを、心から強く願うものであります。

「第5回国東市隣保館まつり」

「いのちの川柳」応募作品

忘却の風は背中を押してくる

国東町 山本 静子

キャッチボールで夢を語った仲間たち

武蔵町 藤原 良輔

お知らせ

☆同和問題学習会（隣保館）

9月13日（木）午後2時

演題 「在日コリアンと部落問題について」
講師 福岡県人権研究所

研究員 柳井 美枝さん

問い合わせ

国東市隣保館

0978-68-1722